

中学校社会科教科書『公民』を用いた日本語教育の効果と課題：専門科目とのつながりを見据えた授業実践

著者	岡村 佳代, 阿久澤 弘陽, 棚橋 明美, 松村 憲
雑誌名	聖学院大学論叢
巻	第32巻
号	第1号
ページ	57-71
発行年	2019-10-25
URL	http://doi.org/10.15052/00003644

〈原著論文〉

中学校社会科教科書『公民』を用いた日本語教育の効果と課題 ——専門科目とのつながりを見据えた授業実践——

岡村佳代・阿久澤弘陽・棚橋明美・松村 憲

抄 録

本稿では、日本語科目から専門科目を段階的につなぐことを目的に設置された、中学校の『公民』の教科書を用いた日本語科目「アカデミックジャパニーズ」の授業実践の報告を行うとともに、受講生の授業への意識を質問紙調査から明らかにした。分析の結果、非漢字圏出身者のほうが授業や教科書の難易度がやや高いと感じる傾向が示されたが、全体的に授業を有意義なものとして捉えており、特に、政治経済学科の学生は、専門へのつながりを強く感じ、評価していることがわかった。「アカデミックジャパニーズ」の有用性は確認できたものの、特に政治経済以外の学科の学生には、それぞれの学科のニーズに合うような内容選定がさらに求められる。

キーワード：学部留学生、日本語科目、専門科目とのつながり、中学校教科書「公民」、漢字圏・非漢字圏

1. はじめに

現在、大学の留学生日本語教育を取り巻く環境は、外国人受け入れ政策の変容にともない大きく変化している（庵，2019）⁽¹⁾。庵（2019）は、大学における留学生教育は当初、大学院入学を目指す研究生の予備教育を主な目的としており、日本語を活かしたキャリアに就くことを目的としたいわゆる日本語エリートが対象であったが、近年はこれが少数派で、現在の留学生の多数は大学間の交流協定に基づいて来日する交流学生であると指摘している。そして、そうした交換留学生は必ずしも日本語学習の動機づけが高いとは限らず、海外の一流大学から多くの留学生を受け入れたいという大学の留学生獲得戦略の変化もあいまって、留学生教育を英語で行うという「英語シフト」の流れが強まっていると述べている。庵（2019）は、こうした状況の中で、大学での日本語教育がその専門性を維持しながら生き残る方法を論じる必要があるとしている⁽²⁾。

庵（2019）が指摘するような「交換留学生が現在の大学における留学生教育の主流である」とい

う事実は、実状の一面を的確に捉えていると思われるが、全体的な傾向はこれとは異なっている可能性は否定できない。事実、牲川（2019）では、「大学等に進学する留学生の大半が日本語学校出身であることは間違いない（牲川，2019：11）」と述べられており、交換留学生ではなく、日本語学校出身者が留学生のほとんどを占める大学は少なくないと推察される。また岡村（2019）では、学部留学生の多様化が進んでおり、将来日本で就職することを目指す、すなわち日本語を活かしたキャリアに就くことを目指す留学生も多くいることが指摘されている。

したがって、大学の留学生日本語教育においては、庵（2019）の述べるような交換留学生を主とした変化もある一方で、日本語を活かすキャリア形成を目指し日本語学校から大学に進学する留学生も増えている状況にあらう。こうした状況を踏まえながら、学部留学生の日本語教育の在り方を体系的に考えていく必要がある。そうした日本語教育の在り方を考える中で一つの課題として挙げられるのは、日本語教育と学部の専門科目とのつながりをいかにして捉えるか、という問題である。岡村（2019）では、インタビュー調査を通じて学部留学生の修学意識を明らかにしており、彼らが大学修学を継続させていくためには、「明確な目標設定」「大学生活に関する事前の情報提供」「学業不振に陥らせないための支援」「学業不振に備える支援」の4つが鍵となると述べている（岡村，2019：23-24）。とりわけ、「学業不振に陥らせないための支援」において、「日本語学校ではある程度日本語ができると思っていた留学生でも、大学に入学すると自分の日本語が通じないことや、授業の日本語が理解できないことで挫折を経験することがある」ことや、「日本語学校での日本語と大学の専門科目で使用される日本語には、内容的にも教員の話し方などにも大きなギャップがある」ことから、「専門科目に必要な背景知識を得るための授業を設置するなど、専門科目と日本語の担当教員が連携し、少しでもそのギャップを埋めるための工夫をしていく必要がある」としている（岡村，2019：24）。したがって、日本語の習得を主な目的とする日本語学校での学びから、日本語をツールとして用いる学部教育との間にある壁を取り除くために、日本語教育から専門科目への確に橋渡しをすることが求められているといえるだろう。日本語学校から大学に進学し、日本語を活かしたキャリア形成を望む留学生が一定数いる状況において、大学学部での日本語教育の重要性はますます増している。したがって、より具体的な形で専門科目とのつながりを意識した日本語教育の可能性を探ることは、今後の大学における留学生日本語教育をより充実したものにするために必須である。

本稿では日本語学校から大学に進学した留学生対象の日本語教育に焦点を当て、そこでの課題について述べ、その解決方法を論じる。具体的には、日本の中学校社会科教科書『公民』を用いた日本語教育の授業実践をケーススタディとして取り上げ、その効果と課題を、質問紙を通じた学生の授業に対する意識調査から明らかにする。

以下、まず2章では学部留学生が学部の専門科目を受講する際に抱える問題と、その解決の方向性について簡単に述べる。3章では、2章で指摘した課題を克服するために筆者らが実践した中学

校社会科教科書『公民』を用いた授業の実践内容についてまとめる。4章では、3章で述べた授業に対する学生の意識を、質問紙を用いた調査で明らかにする。5章は本稿のまとめである。

2. 学部留学生向け日本語教育と学部専門科目の接続をめぐる課題

日本語学校から進学した学部留学生が、学部での専門科目を日本語で受講する際に直面する問題は多岐にわたる。専門科目の履修にあたり、高水準の四技能が求められることはもちろん、膨大な量の資料の選定や情報の取捨選択などにおいて当該分野の専門的な知識をある程度日本語で習得しておくことも求められる⁽³⁾。こうした課題を解決するためには、専門科目に通ずる読解教材による専門語彙のインプットが必須であり有効であることはある程度自明であるが、専門語彙を用いたアウトプットも欠かせない。専門科目を担当する大学教員は日本語が専門でないことがほとんどであり、留学生の発音、すなわちアクセントや文のイントネーション等のミスによってコミュニケーションに致命的な支障をきたすことがあることを考えると、このことは想像に難くない。よって、専門語彙の発音や文単位でのイントネーションの修得も学部留学生にとっては喫緊の課題である。くわえて、日本で育った学生と留学生との間に見られる背景知識・基礎知識の差も問題になろう。大学入学後の日本語教育を専門科目への「橋渡し教育」として位置づけることの重要性を論じた横田(1993)は、大学で専門教育を受ける際に学部留学生が難しさを感じる理由の一つとして、「日本人の大学生がもっている日本社会一般に関する知識が足りない」ことを挙げている(横田, 1993: 45)。日本で育った学生であれば、中学までの義務教育を通して既習であったり、習慣的に理解したりしていることであっても、外国で育ち、外国の教育を受けてきた留学生にとっては、そのような知識を持ち合わせていないことがある。ある程度の日本語能力があったとしても、背景知識や基礎知識がないままに学部の専門科目を受講することには難しさを感じるだろう。

こうした課題を解決するための一つの方法としては、学部教育を前提とした日本語科目のシラバスを組み、専門科目の内容を組み込んだ日本語教育を行うことであるが、日本語教員が学部の専門教育に必ずしも通じているわけではなく、現実的ではない。仮にそれが可能な人材がいたとしても、そうした人材はごく少数であり、指導できる留学生の数が限られてしまう。ある程度の規模の留学生に対し専門科目の知識に目配りをしながら日本語教育を行うには、学部教育に直結しかつ日本語科目としても耐えうるような教科書が求められる。

日本語教育の分野においては、主に「日本事情」という名を冠した科目において日本文化・社会に対する一般的・概説的知識を学ぶことができるが、こうした授業で用いられる教科書は、必ずしも学部の授業に直接つながるものであるとは限らない。近年もいくつかの日本事情の教科書が出版されているが、それらが日本語教育と専門科目とをつなぐという目的に適っているとは言い難い。例えば、佐々木(2017)『クローズアップ 日本事情 15 日本語で学ぶ社会と文化』では、日本の

教育や経済という学部教育に直結しうる話題も取り上げられているが、その対象には日本語中級から中上級が想定されており、日本に関する全般的な基本的事項を扱うにとどまっている。上級者を対象としたより専門的な日本事情関連の教科書としては、野本・坂本・東京外国語大学国際日本研究センター編（2016）『日本をたどりなおす29の方法』が挙げられる。この教科書では、いわゆる文系学問の多種多様なテーマが扱われているが、テーマが多岐にわたるがゆえに、ある特定の分野の知識全般を得るのには向いていない。また、この教科書は日本人学生の使用にも耐えうる設計となっており、日本で教育を受けてきた日本人学生にとっては前提となっている知識の習得を目指しているわけではない。このように最近のものを見てみても、学部教育が前提としているような知識をある程度の深さで広く扱っている教科書はほとんどなく、日本事情という性質もあり、一つの分野に特化した形をとることは少ない。

そこで筆者らは、日本事情などの日本語教育関連の教科書ではなく、日本人学生のすべてが義務教育課程で学ぶ内容と同様の広さと深さを持った教科書が必要であると考え、中学校社会科教科書である『公民』を採用し、それをベースとした授業（科目名「アカデミックジャパニーズ」）を行った⁽⁴⁾。

しかし、上記の『公民』を用いた授業はあくまでも日本語教育の一環であり、専門的な授業を行うことを目的とはしていない。これは、いくら中学校の教科書といえども、日本語教員が専門用語を導入しつつ、内容にまで踏み込んでいくことは現実的ではないからである。実際に横田（1993）では、日本語教員による専門的内容の教授と日本語の教授を統合させた「内容中心日本語教育」の実践を報告しているが、授業準備に時間がかかり、負担が重すぎると述べられている。また、専門的日本語教員が使用するティーチャートークに代表される日本語と、実際の学部の専門科目で使われる日本語には少なからず乖離が見られ、たとえ日本語教員が専門科目に近づけた授業をしたとしても、専門科目の自然な授業形態には遠い。こうした乖離を解消するために、筆者らの大学では、中学校・高等学校の社会科を専門とし、長年中学校で教鞭を執っていた教員が『公民』に関する内容を深める授業（科目名「政治経済」「現代社会」）を、「アカデミックジャパニーズ」と同時に開講し、日本語教育から段階的に専門科目へと移行できるようにした⁽⁵⁾。

以下、筆者らの大学で実施した中学校社会科教科書『公民』を用いた授業である「アカデミックジャパニーズ」の概要を述べる。その際、その授業を設置するに至った背景や当該科目の位置づけについても、「政治経済」「現代社会」とのつながりとともに言及する。

3. 中学校社会科教科書『公民』を用いた授業の概要

本章では中学校社会科教科書『公民』を用いた留学生用授業の概要についてまとめる。それにあたり、その授業の前提となる実践に至った背景とその全体像を簡潔に述べる。その後、より具体的

な授業内容を、対象学生の属性などの情報にも言及しながら詳述する。

3.1. 背景

筆者らの勤務先である聖学院大学における留学生数は、2019年4月現在、412名となり、全学生数の約2割を占める。留学生の出身国は、中国が205名、ベトナムが174名で留学生全体の9割を占め、以下、ネパール、スリランカ、台湾、タイ、カンボジア、マレーシア、インド、ウズベキスタン、ドイツ、バングラデシュ、ケニア、スウェーデン、ミャンマーとなっている。このように、15の国と地域出身の多様な文化的背景を持った留学生を受け入れており、特に、非漢字圏出身の留学生を多く受け入れていることは本学の一つの特徴ともいえるだろう。また、留学生の所属学科については、政治経済学科が267名と最も多く、次いで欧米文化学科58名、日本文化学科40名、心理福祉学科31名、こども心理学科6名、人間福祉学科10名となっており、政治や経済に関することを専門的に学ぶことへのニーズが高いが、文化や心理、福祉の分野を専門的に学びたいと考えている留学生も多い。

このような留学生の文化的背景の多様性は大学にとっての財産であるが、一方、こうした留学生が学部での専門科目を学ぶうえで難しさもはらんでいる。前述の通り、例えば、政治経済学科の留学生が政治や経済の専門的内容を学ぶ際、日本人学生にとっては既習であったり、習慣的に理解していたりするようなことでも、彼らはその内容や概念を理解していないことがある。特に、非漢字圏の学生の場合には、テキストの漢字からその意味や概念をイメージすることも難しく、留学生本人からそのような困難を聞くことも多い。また、専門科目の教員からも同様に、そのような状況に困惑する声が上がっていた。このような背景から、聖学院大学では2018年度より留学生のカリキュラムを抜本的に見直し、入学から専門科目へ（さらに就職へ）とつなげることを目指した日本語科目や教養科目が設置された。

3.2. アカデミックジャパニーズと留学生用教養とその目的

具体的な授業実践の内容に入る前に、留学生の授業の履修に関する概略を述べておく。2018年度に入学した留学生は、入学時のプレイスメントテストによって、日本語1・2・3の3つのレベルに分けられた。本稿で取り上げる「アカデミックジャパニーズ」は、日本語2（中～中上級レベル）の必修科目である。この授業の目的は、「アカデミックジャパニーズ」との連動科目として設置した留学生教養科目である「政治経済」「現代社会」の理解を促進することである。政治経済学科の学生は「政治経済」を必修科目として履修し、欧米文化学科、日本文化学科、心理福祉学科の学生は「現代社会」を必修科目として履修する。「政治経済」「現代社会」では、日本語教員ではなく、中学校・高等学校の社会科を専門とする教員による『公民』の教科書の内容に関する講義およびそれに基づいた簡単な討論が行われる。この授業を通して日本人学生が義務教育課程において学習す

る基礎的な知識を身につけ、さらにその知識を自分の経験と照らして理解を深め、よりスムーズに専門科目の内容へと移行できるようになることが目指されている。同時に、専門科目の教員の日本語に慣れることも目的としている。その留学生用教養のベースとなる語彙や概念、表記や発音などを事前に学習・整理する目的のもとに設置されたのが「アカデミックジャパニーズ (政治経済)」「アカデミックジャパニーズ (現代社会)」である。「アカデミックジャパニーズ」では、「政治経済」「現代社会」の理解を促すとともに、次学期以降に履修することになる専門科目を無理なく理解できるだけの専門用語の聞き取り能力や情報の取捨選択能力の向上も目指した。さらに、受講生一人ひとりが専門科目受講の際に、どのような予習・復習をするべきなのかを考え、自分に合った勉強方法を身につけることも促したいと考えた。

学期が始まる前に、「政治経済」「現代社会」の担当教員と「アカデミックジャパニーズ」の担当教員が綿密な打ち合わせを行い、進度や回ごとに授業で扱う範囲や内容を確認し、それぞれのシラバスを作成した。「アカデミックジャパニーズ(政治経済)」「アカデミックジャパニーズ(現代社会)」、留学生用教養「政治経済」「現代社会」および専門科目の関係を図 1 に示す。

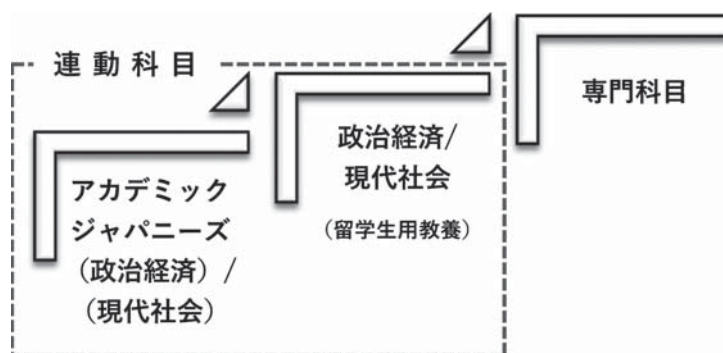


図 1 アカデミックジャパニーズから専門科目履修までのイメージ

図 1 を見るとわかるように、「アカデミックジャパニーズ」と留学生教養科目である「政治経済」「現代社会」は、受講生が段階的に専門科目へと向かうように設計されている。

3.3. アカデミックジャパニーズの授業内容

3.3.1. 受講生

「アカデミックジャパニーズ」では、前述の通り専門学科別にクラス分けが行われ、履修する留学生の日本語レベルは中～中上級程度である。2018 年度前期は、政治経済学科生は 42 名の留学生を 2 クラスに分け、その他のクラス（欧米文化学科、日本文化学科、心理福祉学科）は計 26 名で 1 クラス編成とした。2018 年度後期は、政治経済学科生 24 名の留学生を 2 クラスに分け、その他のクラスは計 12 名 1 クラス編成であった。どのクラスも漢字圏と非漢字圏の出身者の混合クラス

であった。それぞれのクラスで、週2回の授業（1コマ90分）を15週30回行った。

3.3.2. 実践内容

教科書としては『公民』（東京書籍）を用い、政治経済学科は「政治」と「経済」、その他の学科は「現代社会」の理解に関する部分を抜粋し、学期初めに配付したシラバスにしたがって授業を行った⁶⁾。他に、語彙調べシート、確認プリント、小テストなどのプリントを、補助教材として毎回配付した。

授業では受講生が次回の授業範囲（2ページから多ければ10ページ程度）を一読し、その範囲分の語彙調べシートを作ることを予習として課した。語彙調べシートでは主に、読み方や意味がわからない語彙や表現（主に漢字語彙）をすべて書き出し、読み仮名と母語訳を付けることと、短文作成することを課した。短文作成は自分で考えて作成することを推奨したが、固有名詞や高度に専門的な用語もあるため、辞書からの転載や教科書からの抜き書きも許可した。いずれにせよ、授業前にすべての受講生が教科書を一読することにより、ルーティンとしての予習習慣の形成と、授業中の辞書の使用をできるだけ回避することを目的としている。語彙調べシートは教員が添削し、その都度返却したり、翌週に返却したりすることでフィードバックを行った。必要に応じて、間違えやすいミスなどをクラス全体で共有した。

授業内では、受講生に教科書を音読させ、専門用語の読み方やアクセント、文のイントネーション等を確認指導した。必要に応じて、音読のペア練習を行い、学生同士の協働学習を促し、教科書の内容の理解に努めさせた。また、授業内では中上級レベルの文型・文法を取り上げ、作文を課したり、ディクテーションを行ったりした。

受講生の理解度は、毎回の確認問題や概ね単元の区切りごとに行われる小テストで随時確認した。確認問題では、前回の「アカデミックジャパニーズ」で扱った範囲の復習という位置づけで、漢字の読み、理解度確認問題、文法問題だけでなくディクテーションも課し、より実際の専門科目に近いスキルが養えるようになっている。中間テストと期末テストも実施し、中間テストは音読と聴解、期末テストは筆記を課した。内容の解説は日本語学習の観点からのみ行い、より深い理解の促進や考察・討論などは、連動科目である留学生教養科目の「政治経済」「現代社会」の授業に委ねた。

4. アカデミックジャパニーズに対する留学生の意識調査

上述のような目的、内容で行った「アカデミックジャパニーズ」の授業に対して、受講した留学生がどのような意識を持っているのかを調べるために、質問紙調査を実施した。

4.1. 調査の概要

本調査を実施するにあたり、「聖学院大学研究倫理審査委員会」の承認を得た。質問紙の項目は、【授業への取り組み】【授業の役割への認識】【授業への興味】【授業内容への評価】【授業の難易度への認識】についての質問と【授業に対するコメント】という自由記述からなる。【授業への取り組み】【授業の役割への認識】【授業への興味】【授業内容への評価】の項目については、「5, とてもそう思う」～「1, ぜんぜんそう思わない」の5件法, 【授業の難易度への認識】については、「5, 難しい」～「1, 簡単」の5件法で回答を求めた。

この質問紙を、2018年度春学期、秋学期の「アカデミックジャパニーズ」の最終授業内で配付し協力を依頼した。質問紙調査を実施する際には、研究の目的、調査方法などの説明と調査協力者への配慮や権利、データ公開などについての説明を行い、同意が得られた受講生のみ回答を依頼した。

2018年春学期は、政治経済学科の受講生38名、欧米文化学科・日本文化学科・心理福祉学科の受講生24名、秋学期は、政治経済学科の受講生23名、欧米文化学科・日本文化学科・心理福祉学科の受講生11名からの協力、回答が得られた。調査対象者の属性は表1の通りである。

表1 調査対象者の属性

学科	受講 学期	性別			漢字圏／非漢字圏			合計
		男性	女性	未回答	漢字圏	非漢字圏	未回答	
政治経済学科	2018 春	22	15	1	16	21	1	38
	2018 秋	12	11	0	14	9	0	23
欧米文化学科	2018 春	6	6	0	10	2	0	12
	2018 秋	3	5	0	5	3	0	8
日本文化学科	2018 春	2	3	0	4	1	0	5
	2018 秋	1	0	0	1	0	0	1
心理福祉学科	2018 春	2	5	0	4	3	0	7
	2018 秋	0	2	0	1	1	0	2
合計		48	47	1	55	40	1	96

4.2. 分析方法

「アカデミックジャパニーズ」受講生の【授業への取り組み】【授業の役割への認識】【授業への興味】【授業内容への評価】【授業の難易度への認識】がどの程度であるかを把握するために、項目平均値を算出した。また、その認識において、漢字圏出身者と非漢字圏出身者、「アカデミックジャパニーズ（政治経済）」の受講生と「アカデミックジャパニーズ（現代社会）」の受講生では差があるのかを把握するために、*t*検定を行った。以下にそれぞれの結果を順に述べる。

4.3. 調査の結果と考察

4.3.1. アカデミックジャパニーズへの認識：漢字圏出身者と非漢字圏出身者の比較

まず、「アカデミックジャパニーズ」の受講生全体の傾向について述べると、いずれの項目においても平均値が高く、それぞれの留学生が一生懸命取り組み、「アカデミックジャパニーズ」という授業の役割を認識し、授業内容についても役に立ったと感じている度合いが高いことが示された(表2)。また、授業や使用している『公民』の教科書についてもちようどいいレベルだと感じたという結果が示されている。

受講生の「アカデミックジャパニーズ」に対する認識に、漢字圏出身者と非漢字圏出身者の間で差異があるのかを調べるためにそれぞれの項目について *t* 検定を行った(表2)。その結果、授業内容への評価の「文法問題は役に立った」という項目において、漢字圏出身者よりも非漢字圏出身者のほうが有意に高いことが示された ($t(91) = 2.27, p < .05$)。非漢字圏出身の受講生のほうが、教科書の本文中に使用されている文法項目の学習がより役立ったと感じていることが示されている。次に、「授業のレベル」において、漢字圏出身者よりも非漢字圏出身者のほうが有意に高く ($t(66.19) = 3.41, p < .01$)、漢字圏出身の受講生に比べ、非漢字圏出身の受講生のほうが授業を難しいと感じることが示された。同様に、教科書のレベルについても、漢字圏出身者よりも非漢字圏出身者のほうが有意に高く ($t(80.11) = 3.34, p < .01$)、非漢字圏出身の受講生が教科書のレベルにおいても多少の難しさを感じることを示された。

表2 アカデミックジャパニーズへの認識：漢字圏出身者と非漢字圏出身者の平均値の比較 (*t* 検定)

	全体 (n=96)		漢字圏(n=55)		非漢字圏(n=40)		<i>t</i> 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
授業への取り組み	授業に一生懸命取り組んだ	4.339	.825	4.204	.919	4.487	.642	-1.638
授業の役割への認識	「政治経済/現代社会」の授業を受けるのに役に立った	4.378	.671	4.359	.710	4.388	.625	-.205
	専門の授業を受けるための日本語能力を身につけるのに役立った	4.332	.706	4.291	.762	4.372	.625	-.545
	これから専門の授業を受けるための勉強方法を身につけるのに役立った	4.193	.745	4.164	.811	4.213	.649	-.315
	自分の日本語能力を振り返るきっかけになった	4.253	.714	4.204	.810	4.300	.564	-.645
授業への興味	おもしろい/興味深い	4.125	.837	4.109	.916	4.125	.723	-.091
授業内容への評価	ことばの表は役に立った	4.245	.698	4.146	.731	4.368	.633	-1.526
	テストは役に立った	4.260	.885	4.236	.860	4.275	.933	-.206
	確認プリントは役に立った	4.427	.707	4.346	.700	4.525	.716	-1.223
	文法問題は役に立った	4.255	.789	4.093	.875	4.462	.600	-2.274 *
	教科書の音読は役に立った	4.495	.635	4.482	.693	4.500	.553	-.136
授業の難易度の認識	授業のレベル (5,難しい4,やや難しい3,ちようどいい2,少し簡単1,簡単)	3.250	.725	3.036	.576	3.550	.815	-3.414 **
	教科書のレベル (5,難しい4,やや難しい3,ちようどいい2,少し簡単1,簡単)	3.281	.750	3.073	.690	3.575	.747	-3.340 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

これらの結果から、漢字圏出身の受講生は、『公民』の教科書の内容、授業内容の難易度をほぼ「ちようどいい」と感じているのに対し、非漢字圏の受講生は多少難しさを感じていたことが示唆された。質問紙の自由記述においても「この授業はベトナム人に対して少し難しかったけど中国人たちに対して、簡単だと思います。(漢字ばかりだから)(非漢字圏受講生)」(留学生のコメントはすべて

原文ママ) という回答があり、非漢字圏出身の受講生自身から見ても、漢字圏出身の受講生との間に認識の差があったと感じているようである。また、「この授業を受ける前は、漢字と本読みは私にとってむずかしかった。でもこの授業は受けてたくさんの知らなかった漢字を覚えるようになりました。(非漢字圏受講生)」との回答からは、非漢字圏出身の受講生にとっては、最初は漢字が難しく感じるが、週2回の受講を通して、徐々に漢字を覚えたり、読みがスムーズになったりしていくことが実感できたことがうかがえる。また、教科書の中で使用されている文法の学習についても、非漢字圏出身の受講生のほうがより役に立ったと感じていたのは、漢字だけでは意味が理解しにくい非漢字圏出身の受講生にとって、文法項目や表現を学ぶことが、漢字圏出身の受講生以上に文の理解に役立ったからではないかと考えられる。

さらに、漢字圏、非漢字圏出身の受講生がともに最も役に立ったと感じているのは「音読」であることも示された。漢字圏出身の受講生であっても、漢字の読みに関しては苦勞していたり、正確ではなかったりすることを自覚していることがこの結果につながったのではないかと推察される。「授業を参加して、よく読んで発音や読む力が増えてきたと思います。言葉の意味もよくわかってきたと思います。(非漢字圏受講生)」という自由記述からは、漢字圏出身か非漢字圏出身かにかかわらず、音読をすることで漢字やカタカナ語の読み、アクセントなどを確認し、誰にでも伝わりやすい発音をすることや、口頭能力を伸ばしていくことの重要性を留学生自身も感じていることがうかがわれる。口頭能力は、日本語能力試験などの資格取得においてはそれほど重視されないが、大学で学ぶ留学生にとっては重要な技能の一つであり、練習機会へのニーズも高いことが示されたといえる。

4.3.2. アカデミックジャパニーズへの認識：受講科目による比較

3.3.2項でも示した通り、政治経済学科所属の留学生は、『公民』の中の「政治」「経済」に関連する分野を学び、欧米文化学科、日本文化学科、心理福祉学科所属の留学生は、「現代社会」に関連する分野を学ぶ。「アカデミックジャパニーズ(政治経済)」の受講生(以下、政経受講生)と「アカデミックジャパニーズ(現代社会)」の受講生(以下、現社受講生)では、「アカデミックジャパニーズ」への認識が異なるかを検討するために*t*検定を行った(表3)。なお、学科別の比較について一元配置分散分析も行ったが、学科ごとの受講者数が顕著に異なるため、本稿での検討については、受講科目ごとに行うこととした(学科別比較については、文末の参考資料を参照されたい)。

分析の結果、まず、授業の役割への認識については、「政治経済/現代社会」の授業を受けるのに役立った」において、政経受講生のほうが現社受講生よりも有意に高く($t(92) = 2.70, p < .01$)、「これから専門の授業を受けるための勉強方法を身につけるのに役立った」においても、政経受講生のほうが現社受講生よりも有意に高いことがわかった($t(50.32) = 2.86, p < .01$)。つまり、現社受講生よりも政経受講生のほうが、「アカデミックジャパニーズ」の授業が留学生用教養科目の受

講に役立つと感じたり、今後の専門科目の受講にも役立つだろうと感じたりしていることが示されている。次に、「授業への興味」においても、現社受講生よりも政経受講生のほうが有意に平均値が高く ($t(94) = 2.44, p < .05$)、政経受講生のほうが、より授業を興味深いと感じていることが示された。授業内容への評価においても、「言葉の表は役に立った」($t(92) = 2.70, p < .01$)、「テストは役に立った」($t(51.88) = 4.05, p < .001$)、「確認プリントは役に立った」($t(94) = 4.21, p < .001$)、「文法問題は役に立った」($t(92) = 4.79, p < .001$)の4項目で、現社受講生よりも政経受講生のほうが有意に平均値が高いことが示された。政経受講生のほうが、授業で行う語彙調べシートの作成、テスト、確認プリント、文法問題により意味を感じていたといえる。そのほか、授業への取り組みや授業の難易度の認識には有意な差は見られなかった。

表3 アカデミックジャパニーズへの認識：政治経済受講者と現代社会受講者の平均値の比較 (t 検定)

	アカデミックジャパニーズ (政治経済) (n=61)		アカデミックジャパニーズ (現代社会) (n=35)		t値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
授業への取り組み	授業に一生懸命取り組んだ				
授業の役割への認識	「政治経済/現代社会」の授業を受けるのに役に立った				
	専門の授業を受けるための日本語能力を身につけるのに役に立った				
	これから専門の授業を受けるための勉強方法を身につけるのに役に立った				
	自分の日本語能力を振り返るきっかけになった				
授業への興味	おもしろい/興味深い				
授業内容への評価	ことばの表は役に立った				
	テストは役に立った				
	確認プリントは役に立った				
	文法問題は役に立った				
	教科書の音読は役に立った				
授業の難易度の認識	授業のレベル (5,難しい4,やや難しい3,ちょうどいい2,少し簡単1,簡単)				
	教科書のレベル (5,難しい4,やや難しい3,ちょうどいい2,少し簡単1,簡単)				

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

このように、「アカデミックジャパニーズ」の授業の役割、授業への興味、授業の内容に関して、政経受講生のほうが全体的に平均値が高いことが示された。政治経済学科所属の受講生のほうが、「政治経済」も「アカデミックジャパニーズ (政治経済)」も、自分たちの専門科目と直結する内容であることから、授業の意味を感じやすかったのだろう。これは、「授業はとてもいいと思います。政治経済について知識もわかりやすいです。(中略)政治経済についてことは、たくさんを勉強した。来年の専門の授業のために大きな役割を果たしたと思います。(漢字圏受講生)」, 「専門の科目を準備するために、この授業は役に立ちました。漢字の読み方や意味がわかるようになりました。よかったですと思います。(非漢字圏受講生)」, 「私にとってこの授業は役に立ちました。政治経済の専門がよくわかるために、この授業が必要だと思います。文法や言葉などが難しいと思うので、この授業がないと政治経済の専門に入ったら困ると思います (非漢字圏受講生)」という受講生の自由記述からも、多くの政治経済学科所属の受講生が、専門科目とのつながりを強く意識していたことがうかがえる。

一方で、現社受講生にとっては、「現代社会」と欧米文化学科、日本文化学科、心理福祉学科のそれぞれの専門科目へのつながりを意識しにくかったことが考えられる。また、3学科それぞれに学ぶ内容へのニーズが異なっていたことなどから、政経受講生に比べて全体的に平均値が低くなったと推察される。しかしながら、自由記述においては「日本の社会を了解できました。とても面白い授業です。留学生にとっていい授業だと思います。(漢字圏受講生)」, 「自分の日語能力に役立った、日本の現代社会のことをわかりました。でも日本語の難しさは少し難しいです。(漢字圏受講生)」, 「漢字はむずかしとともに、長ふんしょうをよむのは困っていると思います。けど、このじゅうぎょうは生活にもやくたつので、分かるまで、勉強しても良いと思います。(非漢字圏受講生)」という回答が得られ、専門科目とのつながりへの言及はないものの、日本語能力や日本社会を理解するうえで「アカデミックジャパニーズ」の授業が役に立ったと意味づけていることがうかがえる。

5. おわりに

現在の日本語教育を取り巻く環境は大きく変化しており、それにもなっって今後もますます留学生の多様化が進んでいくと考えられる。日本語学校から大学学部に進学する留学生のニーズや、彼らが専門科目を学ぶうえでの課題を的確に把握し、大学の留学生日本語教育をよりよいものにしていく必要がある。本稿では、留学生が専門科目の受講において直面する課題を克服するためには、日本語教育と専門科目をできるだけ有機的につなげることが重要だと考え、その試みの一つとしての中学校社会科教科書『公民』を用いた授業の実践内容について述べた。日本語科目と専門科目の間に、専門教員による『公民』の内容中心の授業をおくことで、日本語教員は専門科目を見据えた「日本語」の教育に専念することができる。その点で、先行研究や過去の実践で述べられているような課題を克服できたといえる。

また、質問紙調査によって受講生の意識を明らかにし、授業の効果と課題について論じた。その結果、多くの受講生が最も有意義だと感じたのは「音読」であり、産出の練習に対するニーズがあることが明らかになった。くわえて、漢字圏出身か非漢字圏出身かによって、有意義だと感じる項目(文法の練習)に差が見られることもわかった。さらに、欧米文化学科・日本文化学科・心理福祉学科所属の受講生は、政治経済学科所属の受講生と比べて、「アカデミックジャパニーズ」に対する興味が若干希薄であり、専門科目に直結する内容であるか否かが、留学生の授業に対する興味の濃淡に影響する可能性が示された。欧米文化学科・日本文化学科・心理福祉学科所属の受講生が、『公民』を用いた授業が「役に立つ」と考える程度は相対的には低かったが、いわゆる日本で育った学生にとって前提的かつ基礎的である知識(いわゆる教養)を学ばせる必要がないということにはならないだろう。自由記述においても留学生自身が、『公民』を学ぶ意味を見出しているケースが見られた。

以上、本稿では中学校社会科教科書『公民』を用いた授業の効果と課題を、学生の意識調査から明らかにした。しかし、今回の調査は質問紙調査であり、全体的な傾向を示したものの、受講者の意識の細かい点までは把握できていない。くわえて、調査対象者の受講生が調査時点ではまだ専門科目を本格的に受講しておらず、学部の専門科目において今回の実践がどのように役に立ったのか、あるいは立たなかったのかについてはまだ明らかになっていない。今後は、インタビューなどを通して追跡調査を行うことで、より詳細かつ具体的に今回の試みの効果と課題を明らかにし、日本語学校を卒業して大学に入学した留学生がよりスムーズに専門科目へと移行していけるような日本語教育の在り方を論じていく必要がある。

注

- (1) 近年の外国人受け入れ政策にかかわる一連の流れは、牲川（2019）に詳しい。
- (2) 庵（2019）は、大学の留学生日本語教育を取り巻く変化に、日本語教育の専門性を維持しながら対応する一つの戦略として、初級文法シラバスの刷新の有用性を論じている。詳細は庵（2019）を参照されたい。
- (3) 小宮（2014a, b）は、専門用語や専門連語（collocation）に関する知識が学部授業の受講にあたり重要でありかつ有用であることを指摘している。
- (4) 小宮（2014a）では、中学「公民」に現れる専門語彙が経済関係学部で使用された教科書に頻繁に使用されており、「公民」の用語を学ぶことが経済学の学習に有効であることが明らかにされている。その点においても、中学校社会科教科書『公民』を用いた授業をすることには意味があろう。
- (5) 「政治経済」「現代社会」の詳細については松村（2019）を参照されたい。
- (6) 東京書籍の『公民』を採用したのは、文体が比較的硬く、学部に所属する留学生も抵抗なく使えると考えられるためである。

参考文献

- 庵功雄「第2章 学習者の変化に対応しポストを守るための留学生日本語教育と〈やさしい日本語〉」
牲川波都季編著『日本語教育はどこへ向かうのか』くろしお出版 2019 pp. 57-78.
- 岡村佳代「留学生の修学意識—修学と就職の間で揺れる留学生—」『留学交流』99 2019 pp. 13-25
- 小宮千鶴子「留学生のための「経済の基礎的専門語」の有効性」『日本語教育』157 2014a pp. 47-62.
- 小宮千鶴子「留学生のための「経済の基礎的専門連語」の有効性」『日本語教育』159 2014b pp. 76-91.
- 坂上康俊ほか『新編 新しい社会 公民』2017 東京書籍.
- 佐々木瑞江『クローズアップ 日本事情15 日本語で学ぶ社会と文化』2017 ジャパンタイムズ.
- 牲川波都季「はじめに—動いている外国人受け入れ政策」牲川波都季編著『日本語教育はどこへ向かうのか』くろしお出版 2019 pp. 7-18.
- 野本京子・坂本恵・東京外国語大学国際日本研究センター編『日本をたどりなおす29の方法—国際日本研究入門—』2016 東京外国語大学出版会.
- 松村憲「留学生の専門学科への適切な接続を目指す実践—政治経済学科の学生を対象として—」『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』28 (2) 2019 pp. 68-72.
- 横田淳子「内容中心日本語教育—留学生の専門への橋渡し教育—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』19 1993 pp. 43-60.

参考資料 アカデミックジャパニーズへの認識：所属学科別の平均値の比較（一元配置分散分析）

		P:政治経済学科(n=61)		A:京大文学部(n=20)		J:日本文化学科(n=6)		S:心理福祉学科(n=9)		F値	多重比較
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
授業への取り組み	授業に一生懸命取り組んだ	4.422	.748	4.200	.834	3.667	1.366	4.556	.726	1.985	
授業の役割への認識	「政治経済/現代社会」の授業を受けるのに役に立った	4.517	.594	4.200	.616	3.667	1.033	4.333	.707	3.912	* P>J*
	専門の授業を受けるための日本語能力を身につけるのに役立った	4.425	.588	4.300	.657	3.333	1.211	4.444	.726	5.012	** P>J**, A>J*, S>J*
	これから専門の授業を受けるための勉強方法を身につけるのに役立った	4.369	.577	3.850	.813	3.167	.983	4.444	.726	8.212	*** P>A*, P>J**, S>J***
	自分の日本語能力を振り返るきっかけになった	4.333	.655	4.200	.616	3.333	1.211	4.444	.527	4.215	** P>J**, A>J*, S>J*
授業への興味	おもしろい/興味深い	4.279	.756	3.950	.826	3.333	1.033	4.000	1.000	3.016	* P>J*
授業内容への評価	ことばの量は役に立った	4.390	.644	3.900	.788	3.833	.408	4.333	.707	3.471	* P>A*
	テストは役に立った	4.541	.673	3.600	1.095	3.667	1.033	4.222	.667	8.159	*** P>A***
	確認プリントは役に立った	4.639	.606	4.050	.686	3.833	1.169	4.222	.441	6.292	** P>A***, P>J**
	文法問題は役に立った	4.525	.653	3.650	.745	3.500	.837	4.333	.707	10.601	*** P>A***, P>J**
	教科書の音読は役に立った	4.570	.563	4.450	.686	3.667	.817	4.667	.500	4.349	** P>J**, A>J*, S>J*
授業の難易度の認識	授業のレベル (5:難しい4:やや難しい3:ちょうどいい2:少し簡単1:簡単)	3.180	.695	3.300	.733	3.500	1.049	3.444	.726	.665	
	教科書のレベル (5:難しい4:やや難しい3:ちょうどいい2:少し簡単1:簡単)	3.295	.738	3.400	.883	3.000	.894	3.111	.333	.602	

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Effects and Problems of Japanese Language Education Using Social Studies Textbook “Koomin (‘Citizen’)” for Junior High Schools: Designing a Japanese Language Subject to be Connected to Specialized Subjects

Kayo OKAMURA, Koyo AKUZAWA, Akemi TANAHASHI,
Ken MATSUMURA

Abstract

This paper investigates effects and problems of a Japanese language subject named “Academic Japanese” where teachers use the social studies textbook “Koomin (‘Citizen’)” for junior high school. This “Academic Japanese” is designed to gradually connect the Japanese class to specialized subjects. In this paper, we introduce the course content and reveal the students’ reactions to the class by examining questionnaire results. Specifically, we found that the students from non-kanji areas tend to recognize the class contents and the textbook slightly more difficult than those from kanji areas; however, many students considered this class to be meaningful. Moreover, the students in the department of Political Economy were conscious of the connection to the specialty and evaluated it more than the students in other departments. This result exhibits that “Academic Japanese” is meaningful, but we need to design the contents properly for each department.

Keywords: undergraduate international student, Japanese language subject, connection between Japanese class and specialized subject, junior high school social studies textbook “Koomin (‘Citizen’),” kanji and non-kanji areas